

論争史としての現代経済学

—市場メカニズム・社会主義の崩壊・ケインズ経済学—

塚 本 恭 章

Modern Economics as a History of Controversy

—Market Mechanism, Collapse of Socialism,
and Keynesian Economics—

Tsukamoto, Yasuaki

Abstract

This paper discusses modern economics as a history of controversy, in particular focusing on 1) market mechanism, 2) the collapse of socialism, and 3) Keynes' economics and macroeconomics. In this working process, Masahiro Nei's book "What is Economics ? (Japanese) " is critically reconsidered and its contents on the diversification of history of economic thought is regarded as a potentially new methodology of economics. This article also argues for the role and significance of history of economics in university education.

<目次>

1. はじめに
2. 「論争史」のなかの経済学
 - (1) 市場メカニズムと社会主義の崩壊
 - (2) ケインズの経済学とマクロ経済学

- (3) 経済学者の問題精神
3. 「来るべき経済学」のために
 - (1) 貨幣と市場の「多元性」論
 - (2) 経済思想の「多様性」論
4. おわりに

1. はじめに

1970年代初頭に表明されたジョン・ロビンソンによる有名な「経済学の第2の危機」宣言を指摘するまでもなく、一般に「経済の危機」は「経済学の危機」とセットであるとみなされよう。実際のところ、『経済危機と学問の危機』（岩波書店、2004年）と題される本も刊行され、経済学をこえて事態は「学問」に及ぶとの指摘もある。では21世紀の現在、われわれが直面しているのは「経済学の第3の危機」なのであろうか、それともすでに第3の危機を経て、「経済学の第4の危機」を迎えているのだろうか¹。さらに根源的な問いを発すれば、そもそも「経済学」とはどのような学問・学術なのであろうか。〈危機〉の主体である「経済学（史）」の姿そのものが真摯に問われている、この点を正確に再認識することが重要なのである。

こうした広く深い問題意識も含まれているに違いない、橋本俊詔・根井雅

¹ 巻末の神野直彦氏によるまとめの文章「危機と責任」では、実際に「経済学の第3の危機」という表現が使われている（神野他 [2004] 237頁）。昨年他界された宇沢弘文氏の『経済と人間の旅』（日本経済新聞出版社、2014年）所収の「混迷する近代経済学の課題」（1971年発表）ははじめ多くの論稿は、古くから社会科学としての経済学のあり方について警鐘を鳴らし、その新たな再興を模索していた。最近のものでは、岩井克人氏はじめ複数の経済学者の論稿（インタビュー論稿や対談）を収録した『経済学は何をすべきか』（日本経済新聞出版社、2014年）。冒頭の岩井論文のタイトルは「経済学に罪あり」で、「経済危機と経済学の責任」から議論を説き起こす。それは資本主義についての対立する既存の経済理論・思想を系統的に整理し、その対立に決着がついたと宣言するもので、〈論争史〉から現代経済学を省察する本稿のスタンスにとって大変有益な内容となっている。なお岩井氏が師である「宇沢弘文先生」について書いた追悼文『『冷徹な頭脳』より『暖かい心』』（日本経済新聞朝刊 2014年9月29日）もぜひ併読されたい。

弘両氏による時機を得た対談本『来るべき経済学のために』（人文書院、2014年）は、ノーベル経済学賞の功罪や大学の経済学教育の現状など多面的な「経済学」問題にも踏み込みスリリングであり、現代経済思想史を専門とする根井氏の『経済学とは何か』（中央公論新社、2008年）をあらためて精読・精査する契機となった（本書は、2014年に『経済学再入門』として講談社学術文庫から再出版された）。本稿は、当該本書を手掛かりに上記の問いについて私なりの一考察を及ぼしてみようという試みである。

同様のテーマを扱ったものとしてすでに多くの人に読まれ、市民権を獲得しているのは、佐和隆光氏の名著『経済学とは何だろうか』（岩波新書、1982年）であろう²。根井氏も本書冒頭でこの名著について言及している。では根井氏による当該作品の特徴や趣向はどこにあるのか。

ハーバード大学でかつて学んでいた故・都留重人氏は、同大学で学問的交流を深めたオスカー・ランゲに幾度となく学術文献の教示を求めたそうだが、いつでも「記憶のなかの引き出し」からモノを取り出すようにすらすらと論文名を書き連ねてゆく彼の姿が実に印象深かったという述懐を、ランゲへの追悼文のなかで述べていた。氏の『経済学とは何か』を最初に読了し、本文や脚注を通じて引用・列挙された数多くの諸文献を眺めながら思わず想起させられたのが、この都留氏の回想であった。「本書は比較的短期間に書き上げられたもの」（179頁：以下、断りのない場合の表記は本書の頁数）であるという見解も、その述懐が奏でる「映像」を鮮明化する作用を発揮した。あるテーマを扱う際の分量配分を含む綿密さとしての「筆致バランス」と、学界状況と時代状況の絡み合いを的確に掴む複眼さとしての「精神バランス」を調和させようとする姿勢は、いわば「職人的」風格ともいべき佇まいを随所に漂わせている。

当該作品の表題は、言うまでもなく易々とつけることのできない直球型の

² 全体的なテーマや趣は異なるが、猪木武徳氏の『経済学に何ができるか』（岩波新書、2012年）も、経済学の基本性格と守備範囲を問い直す名著である。筆者の書評も一読されたい。

果断なタイトルであり、読者の自問自答を誘発するレトリカルな機能を内包している。当該問題に真正面から回答しうるためには、むしろ「経済学」という言説以外のものによって示されなければならない。自然科学や経済学以外の社会諸科学との質的な相違など多岐に及ぶ難題にも取り組まなければならない。そこで著者が採用する方法論上の戦略・目的は、経済学の現状を広い歴史的視野のなかで俯瞰しながら、「過去の色々な論争を通じて、経済学が現にある状況とは違った発展の道筋もあったことを明らかにしたい」（v 頁）ということである。一読すれば分かるように、本書の論述（の展開）は「経済学のあり方」や「経済学の考え方」（後者にはジョーン・ロビンソンの邦訳書や宇沢弘文氏による著書がある）といった内容であり、より正確なタイトルとしては『論争史のなかの経済学』が実質に近い。

主題としての「経済学とは何か」は、過去から現在（いま）に、そして絶えず練り直されてゆくべき「未来」への問いかけでもあり、「論争」とはそうした認識営為に不可欠な「開かれた場（動的プロセス）」にほかならない。以下では、本書の概要や意義を構造的に読み解きながら、あわせて「来るべき経済学」のための準備的一考察を及ぼすこととしたい。

2. 「論争史」のなかの経済学

本書は全4章（+「あとがき」に代えて）から構成され（各章の表題は以下のとおり。第1章：「市場メカニズム」について、第2章：社会主義崩壊の衝撃、第3章：『一般理論』は「革命」だったのか、第4章：「ケインジアン」分裂の帰結）、「小さな本ながら、私がふだん現代経済学について考えていることのほとんどすべてを盛り込んでいると思う」（179 頁）という見解が表明しているように、これまでの著者の諸作品との重複を伴いながら³、社

³ 根井氏の最近の作品については、まとめて書評したので参照されたい（塚本 [2014]）。

会科学としての経済学における重要な思想的・理論的問題群が集約的に取り扱われている。第1・2章、第3・4章がセットであることは一目瞭然だが、「市場メカニズム」をめぐるケインジアンとマネタリストの攻防などを鑑みると、各章を通じた全体としての連関にも配慮されている。

巻末の「あとがき」に代えては、シュンペーターの認識にもとづく「学派」の意味と功罪、経済学の一元化が照射する問題性が、イギリスとフランスの教育現状とともに紹介され、コンパクトながら含蓄に富む。当該箇所を先に読めば、著者の学問精神と本書の理解がより深まろう。ここからひらがえってみると、「経済学部の学生は、いうまでもなく、経済学の現在を教育されるので、現代経済学がどのような経緯を辿って今日に至ったかという知識に欠けている」(iv頁)という冒頭の指摘はさらに重みを増す。「点」だけでなく「線」を描き、そして「面」にすることが学問の醍醐味だからだ。

(1) 市場メカニズムと社会主義の崩壊

経済学の歴史は「市場メカニズム」の役割と特性をめぐる認識の「対立・論争」の歴史であるといっても過言ではない。それゆえ本書が「市場メカニズム」についての省察から出発しているだけで示唆に富む。マルクスの思想と理論をもとに集権的計画経済をすすめたソ連型社会主義の崩壊は、「資本主義対社会主義」という構図で一般的に理解される冷戦構造の終結を帰結したが、その経済学的な含意と影響は広範囲に及んでいる。

第1章では、学派の「内」・「外」における、経済学の諸概念(市場・競争・均衡)をめぐる理論的理解の顕著な相違とその含意が平易に解説される。すなわち著者によれば、保守派の牙城ともいべきシカゴ学派内において、ミルトン・フリードマンとジョージ・スティグラールの経済哲学(いわゆる市場メカニズム万能主義、市場至上主義)は、当該学派の始祖フランク・ナイトの1923年の論文「競争の倫理」からも十分に汲み取れるように、彼の経済倫理学(市場メカニズム相対化主義、市場メカニズムへの「適度な懐疑主義

的」接近)と明確に区別されなければならない(25頁)。「市場の失敗」より「政府の失敗」のほうが、環境や独占・教育などの各分野において有害で深刻な諸帰結をもたらすと想定する、フリードマンらの「価値判断」(イデオロギーという表現に換言可能しうだろう)がきわめて偏向した特質を有しているのに対し、市場メカニズムの欠陥についても深い省察を重ねたナイトは、まさに「複眼的な」パースペクティブを備えた思想家としてあらためて高く評価される。ナイトの社会哲学に光を当てる試みは、「市場(メカニズム)」認識・評価の観点で特に新鮮だ。

他方、学派外に目を転じれば、価格のバロメーター機能と需給均衡価格決定機能に専念する新古典派(一般均衡論学派)が描く静態的な「完全競争(均衡)」とは根本的に異なり、スミスやリカードの古典派価値論、現代古典派のスラッフアの経済理論パラダイムにおいては、企業家の営利活動に起因する各産業における均等利潤率の成立を「均衡」と捉え、最大利潤を求める諸資本の自由可動性をこそ「競争(過程)」と定義した。それゆえ、スミスの『国富論』で唯一登場する「見えざる手」は、「資本投下の自然的順序」を人為的に歪める重商主義批判の文脈で使用されており、一般均衡理論の解釈と同一視することはできない。こうした古典派的競争観(動的競争過程観)は、昨今台頭してきた「グローバル資本主義」という現象把握のための有効な視座を提示し、その重要性を増している。この点への故・田中真晴氏の認識が大きな示唆に富むという著者の主張も傾聴に値する(47頁)。

第1章の検討内容を引き継いで展開される第2章の末尾は、ソロスの『グローバル資本主義の危機』からの引用文で締め括られ、ジャーナリズムの世界でのみ「市場原理主義」的言説が勢力を保持し続けていたことは、著者によって「滑稽」と称される(91頁)。そしてそうした表層的事態の背後で精力的に推進されてきた経済理論分野における新たな研究諸成果が、その学説史的な系譜をふまえ、社会主義崩壊の「衝撃」として叙述される。最初に示唆しておいたように、ある意味で「資本主義の危機は社会主義の隆盛」に呼

応していたが、「社会主義の失敗は資本主義の勝利」や後者の前者に対する圧倒的優越さという単純な了解構図を意味してはいない。「資本主義」対「社会主義」という問題は、そもそもフリードマンのような「自由市場」対「計画経済」のそれに単純化・矮小化できるものではない（745頁）。

社会主義崩壊の主因を説明する核心的論拠をなすものとして、著者はハイエクの「知識」論を高く評価する。社会主義社会の存立実現可能性を論証しようとしたランゲら理論家は、ハイエクのいう「現場の知識」（知識の分散性・局所性）を看過したが、それは市場の社会的過程を捨象した一般均衡分析を支持したことの論理的帰結にはかならなかった（なお両大戦期を通じ活発におこなわれたいわゆる「社会主義経済計算論争」では、ランゲは社会主義者でありながら近代経済学の一般均衡理論を支持して参戦し、当初は一般均衡理論を支持していたオーストリア学派のミーゼスとハイエクらがそれを次第に棄却し、独自の市場観・競争観を打ち出していったことは当該論争の重要な理論的所産であったことを補足しておきたい）。組織としての企業理論の先駆的業績であるロナルド・コースによる「取引費用」論（「市場と企業の代替機能」論）、「経済的要因」と「非経済的要因」の「循環的・累積的因果関係」論を展開したミュルダールの学説の意義が簡潔に示され、新旧制度学派の潮流を統合化してゆく試みのなかに青木昌彦氏によって先駆的に開拓された比較制度分析が位置づけられる（82-6頁）。

分析言語であるゲーム理論（ことに「ナッシュ均衡」）を援用して「資本主義」の多様性を解明する比較制度分析は、「複数均衡」の可能性によって経済システムの多元性を明確化するという意味で、「多元的経済の普遍的分析」(青木)をなしている。総じてこうした研究プログラムは、シュンペーターによる（「資本主義」対「社会主義」としての）比較「体制」研究から比較「制度」研究、資本主義「衰退」論から資本主義「多様性」論への研究フィールドの比重の移行を含意し、ガルブレイスの「体制収斂」論も「制度多元性」論として読み替える。資本主義の「調整様式（制度）的多様性」に関心を

もつレギュレーション学派の見解も比較制度分析と連動する貢献だ。マルクス派からの総括に論及がないのは物足りないが、社会主義崩壊の衝撃を、冷静な観察眼と心構えに留意して汲み取る著者の姿勢は教訓的である。昨年2014年はベルリンの壁崩壊から4半世紀を経た年でもあり、「社会主義」という思想と理論そして運動をあらためて総括し直すことが必要となるだろう⁴。

(2) ケインズの経済学とマクロ経済学

周知のように、2007年以降に顕在化した世界経済危機（ないしは世界金融恐慌）というきわめて大きな世界史的政治経済現象は、社会科学としての経済学のあり方について実に多くの論議を生み出した。岩井氏による次の文章は、本項で「ケインズの経済学とマクロ経済学」を論じるときに念頭に留めておくべき重要な見解であろう。「経済学、すくなくとも主流派のマクロ経済学は、この金融危機によってまさに『危機』に陥ってしまったのである。例えばポール・クルーグマン（Krugman, 2009）は、過去30年間のマクロ経済学の発達を『良く言ったとしても、見事なほど無用、悪く言えば、確実に有害』であったと断罪している。私自身も、ミルトン・フリードマンの『自然失業率仮説』やロバート・ルーカスの『合理的期待形成理論』、さらにはエドワード・プレスコットらの『実物的景気循環理論』など、1970年代以降の経済学界を支配してきた新古典派的なマクロ経済理論の『発達』は、経済学にとって大いに有害であったと考えている」（岩井他編〔2011〕257頁）⁵。

⁴ 今次の世界経済危機の分析をふまえ、これからの代替的な社会経済システム（ここには「社会主義」もむろん含まれる）を展望する試みとして、マルクス理論家からは伊藤誠〔2009〕〔2013〕とデヴィッド・ハーヴェイ〔2012〕、ケインズ研究者からは平井俊顕監修〔2011〕をあげておく。ここであげた文献すべてに書評しているので、こちらもあわせて参照されたい。

⁵ 25年以上前の論文「マクロ経済学とは何か―市場不均衡とマクロ経済現象」（1987年刊行の『現代経済学研究』東京大学出版会に所収）においても、岩井氏は巻末の文章を次のように締め括っていた。「『ケインズ派』経済学の『没落』とともに、経済学はふたたびあの『見えざる手』によって支配されている新古典派の世界を克明に叙述する脳天気な学問に戻ってしまったように見える」（117頁）。私信によれば、本文で引用した文章のなかで

この2つの章では、経済思想史におけるケインズ『一般理論』の位置やケインズ体系の「革新性」の所在などが詳述される。その過程で、サムエルソンによる「新古典派総合」、ケインズ理論への反革命を担ったフリードマンのマネタリズムとその系譜（とくにルーカスの「マクロ経済学のミクロ的基礎」を貫く方法論）、「新古典派総合」的世界観とルーカスの方法論を継承するマンキューの「ニュー・ケインジアン」、そしてジョン・ロビンソンら「ポスト・ケインジアン」の思想的・理論的諸関係が焦点化されている。

というのは、上記の目的を周到に遂行すべく、「ケンブリッジ学派という『正統派』の内部と、その他の世界の学界の動向の両方を視野に入れる複眼的な眼が必要」（110頁）とされるからだ。この主張には、次のような著者の問題意識も明確に反映されている。すなわち、「ケインジアン」分裂の究極的原因是、一部例外を除けば、ケインズ経済学を中心とする「マクロ経済学」と一般均衡理論を中心とする「ミクロ経済学」両者の理論的連結のあり方を十分に考慮せずに研究・教育がなされてきたという、学問プログラムの欠陥から生じているという総括である（138頁）。両章の主旨をあえて単純化していえば、それは「アメリカ主流派」と「イギリス異端派」の競合性を慎重にフォローし、ケインズの経済学の新たな可能性を展望する。

それではケインズ経済理論の「革新性」とは何か（第3章）。『一般理論』以前にもケインズと類似した洞察を個別に指摘していた論者（ピグーやロバートソン）は存在していたが、ケインズ自身は、有効需要不足のために「非

岩井氏はルーカスとともにトーマス・サージェントもあげていたが、途中のバージョンでその名を「落としてしまった」そうで、「残しておけば良かった」と伝えてくれた。ルーカス、プレスコットそしてサージェントはみなノーベル経済学賞を受賞した人たちであり、本文章はその観点からも強いメッセージ性を発するものである。（岩井の師の）宇沢弘文も、彼があげた反ケインズ経済学の諸種について、「その共通の特徴として、理論的前提条件の非現実性、政策的偏向、結論の反社会性という性格を持ち、市場制度の果たす役割について、宗教的帰依感に似たものを強く持っている」と喝破している（宇沢 [2014] 236頁）。なお橋木・根井の対談本の第3章「ノーベル賞からみる経済学」においても、その賞の動向やあり方などについて興味深い意見交換がおこなわれており、ぜひ参照されたい（橋木・根井 [2014]）。

自発的失業」が生じうる完全雇用以下の水準で経済システムが「静止」してしまう可能性を明示的に論証しているという意味で、公共投資が必要とされるまさに「合理的根拠」（菱山泉）を提示した。ゆえに、パーツとしては既知で断片的であったものを「より洗練化された形で有機的な理論体系（不完全雇用均衡の可能性を示唆する全体としての産出量決定理論）に統合した」（伊藤宣広：115頁）ことにケインズ理論の革新的成果がある。

ケインズが「短期」の想定を採用していたという解釈が影響し、上述の「革新性」の真髄は正確に理解されてこなかったとはいえ、ケインズの理論における「短期」と「長期」の結合を目指した試みも存在していた。たとえば、「投資の二面性」（有効需要の一部をなす「短期」における投資の「長期」におけるシュンペーター的な革新投資への転換）に注目した伊東光晴、「ケインズ政策」を単なる短期の景気浮揚策と等値せず、技術・輸出競争面における諸産業の潜在能力を開花させる「サプライサイドの刷新」論として再定義するカルドア、ケインズとシュンペーターの両理論の有機的統合としての「有効需要とイノベーションの好循環（有効需要創出型の構造改革）」論を提唱する吉川洋らによる多角的理解は、実に興味深く説得的である⁶。さらに「短期」・「長期」に関係なく、「貨幣の非中立性」が成立するとみなすアメリカの「ポスト・ケインジアン」のポール・デヴィッドソンによる、ケインズ理論の核心を「生産の貨幣理論」として把握する見解もあわせて重要視されている。彼の解釈は、マネタリズムやルーカスの「マクロ経済学」不要説（の予言）、「ニュー・ケインジアン」への有力な反論を形成する議論でもある。

こうした第3章の内容をふまえ第4章では、米英における「ケインジアン」の対立と「ケインジアン」に反旗を翻した諸学説が再整理される。1970年代前半まで「主流派」経済学として君臨したサムエルソンのいわゆる「新古典派総合」は、「現実と机上（書齋）の狭間で乖離した思考様式」を伴った「妥

⁶ この点について、吉川洋氏がより詳しく学説史・理論史的展開を試みた作品（吉川 [2009]）が大変有益である。本書への書評とあわせて参照されたい。

協・折衷」論であり、そこに含まれる諸問題は、ジョン・ロビンソンによって具体的に指摘された。「雇用内容」の軽視、「資本論争」⁷における集計の生産関数と新古典派資本概念の欠陥、「歴史的時間」や「不確実性」概念の捨象などだ（142-156頁）。他方アメリカでは、「新古典派総合」が衰退化してゆく過程で登場したフリードマンの「自然失業率仮説」やルーカスらの「合理的期待形成仮説」は、ケインズ政策の「無効性」を唱える命題をなしており、景気循環や失業は「均衡」そのものの変動（失業は「自然失業率」それ自体の推移）と捉える「リアル・ビジネス・サイクル理論」が、新古典派の究極形態＝「終着駅」（吉川洋）として出現した（156-162頁）。

さらにいえば、「メニュー・コスト」、「総需要外部性」や「効率賃金仮説」といった、価格や賃金の硬直的／粘着的傾向を説明すべく「ミクロ的基礎」を通じて、ケインズ経済学を再生させようとするマンキューら「ニュー・ケインジアン」の理論的展開は、たしかに「主流派」経済学の一翼を担ってはいる。とはいえ、彼らの研究プログラムは、「市場の不完全性」によって一時的に生じるケインズの状況（有効需要不足による「非自発的失業」の発生）の長期におけるそれらの解消とともに、新古典派体系がふたたび蘇ると想定する方法論に立脚しており、「長期的雇用理論」としてのケインズ経済学の復権を志向する問題関心とは基本的に異質である（164-6頁）。

結局のところ、こうした著者自身の立ち位置は、いわゆるマーシャル体系における「短期・長期」の意味内容とは区分しうる、「産出量や雇用量の決定に持続的に働く諸力」としての「ケインズの『短期』の想定背後に隠れた『長期的』含意」（128-9頁）を重要視するという、スラッファに多大な影響を受けた「ポスト・ケインジアン」によるケインズ理論再解釈を支持するものにほかならない。その代表的論者の一人であるイトウェルが呼称した「市場メカニズム・グループ」や「不完全主義者」に含まれうる「ニュー・

⁷ 本書では「資本論争」について、「あまり実り多い論争とは言えなかったように思える」（150頁）と述べられているが、それは以前の評価（根井 [1994] 131頁）と温度差があらう。

ケインジアン」らが共有する研究精神は、ケインズのそれと同一視しえず、上述のデヴィッドソンの「貨幣の非中立性」論から捉え返せば、そこには「新古典派総合」と同様の欠陥が内在するものとして理解できる。

総じてサムエルソンの「現実感覚」に敬意を示し、アメリカの「主流派」経済学ではなく、ロビンソンによる「新古典派総合」批判とその基盤をなしたスラッファ理論の学問的系譜（「イギリス異端派」、より正確にはデヴィッドソンを加えた「ポスト・ケインズ学派」）、レギュラシオン理論、新古典派内部からの「拡張／革新」といいうる進化ゲーム理論にもとづく青木昌彦の比較制度分析や「行動経済学」（166-7頁）に多くの期待を寄せる著者の一連の姿勢からは、経済理論の多元主義的アプローチを尊重する経済学観がひとまず窺えるであろう。本書で格別の関心を寄せられる「ケインズ経済学」（より正確には「ケインズの経済学」）をめぐる洞察の深化は、マーシャルを始祖とする「ケンブリッジ学派」の思想的・理論的發展に根ざしている。

(3) 経済学者の問題精神

本書の論述内容とその含意・射程を読み解いてきたが、ここで氏の議論の意義を簡潔に述べておくのがよいだろう。それはトータルとしてみれば、「経済学者（経済学史家）の問題精神」に関わるものである。

1つは、「まえがき」における著者の見解とは逆説的だが、「経済学とは何か」という主題に対して「唯一の回答なるものは提示しえない」ことを、「論争史」のなかの多様な経済思想を概観することで説得的に解き明かそうとしている点である。「経済学の歴史」を「論争の歴史」とみなして上記の主題にあえて回答すれば、経済学とはいわば「論争」学であるということになるであろうか。「論争」学として現代経済学があるといってよいかもしれない。「論争（史）」に主眼を置くスタイルそのものが興味深い。「時代の結晶」であり偉大な先達らの「時代との格闘史」たる「古典」の的確な引用による概念説明、最近の研究動向にも配慮する著者のスタンスからは多くを学ぶこと

ができるだろう。かつて W・ブルスはラスキとの共著『マルクスから市場へ』（岩波書店、1995年）の「序文」で、その大きさは、著作に投じられた時間と労苦の量を明示するよりはむしろ隠すものだと述べたことがあるが、積み重ねられてきた著者の思索の軌跡を鑑みれば、(大著ではなく小著である)「本書の真価は細部に宿る」といえるのかもしれない。

多様な経済思想を学ぶ・知るといふ認識営為は、単一思想によって経済学をめぐる世界観（＝経済学観／ヴィジョン）を構築しえない以上、経済学観それ自体を潤いある豊かなものとして形成することに意義があり、そうした世界観は頑健さを秘めた弾力性に富むものとなろう（唯一の思想・理論が正しいとみなす特権的で崇拜的な思考様式を抑止する機能を発揮する）。現代経済「思想」の「歴史」を学ぶことの意義は、絶えず新たな息吹を注がれてきた生命力ある「思想の重み」、そして深い知的洞察が貫流する牽引力ある「歴史の重み」を知ることと密接不可分の関係にある。『旧約聖書』における「コヘレトの言葉」である「知識が増せば痛みも増す」という意味で、それはまた、「無知の知」を悟ることでもある（根井 [2006] 140-2頁）。著者が長らく唱えている「寛容の精神」は、多様な経済思想を深く学ぶことを通じて初めて会得しうるのであり、そうした構えは、経済学以外の学問分野に接するときにも妥当する普遍的価値を有しているのではないか。

もう1つは上記と重複するが、本書を通じ、著者が「多面的」思考様式を積極的に推奨している点である。いわゆる「多面体」とは、「4つ以上の多角形で囲まれた立体」を数学的には意味するそうだが、氏の「経済思想の多面体（＝経済思想体）」を構成する諸学派をあえて列举すれば、そこには、「新古典派（主流派）」、「ケンブリッジ学派（ポスト・ケインズ学派）」、スラフファの「現代古典派」、そして「新旧制度学派」の少なくとも4つが「基盤」になっている（歴史学派やマルクス派、オーストリア学派についても以前の諸著作のなかで語られているが、その比重は必ずしも多くない）。本書で何度か登場する「複眼的な眼」とはそうした「多面的」思考様式（＝「経済思

想体)とみなしてよく、それを醸成する主体的営為が、開かれた「自由社会における寛容性につながると信じる」(178頁)という著者の確固たる「理念」は決して看過されてはならない。それゆえ、アメリカ的な新自由主義社会とヨーロッパの社民型福祉国家社会をめぐる「制度」的対立という事実がわれわれに投げかけているのは、「社会を見る複眼的な視点をもつ必要があること、時代をとらえる経済思想の重要な役割を示している」(上条 [2006] 12頁)とみなす上条勇氏の見識とも、本書のメッセージは共鳴し合っている。

3. 「来るべき経済学」のために

それでは「来るべき経済学」のために、われわれは何を「洞察」し、「展望」すればよいのであろうか。本論説の最後に、本書の内容・構成とそこでの重要な論点をめぐっての幾つかの疑問点を、「要望」を交えながら率直に提起したい。それらは、「個別の章」(第1・2章)とグローバル化という複合的現象に関わる「貨幣と市場」についてのもの、経済思想の「多様性」論という著者の「経済学観」についてのものという2点に及ぶであろう。

(1) 貨幣と市場の「多元性」論

第1章で「資本主義」という言葉を多用するであろうと著者は述べ、資本がより高い利潤率を求めて自由に駆動することを的確に射程にいたした古典派的競争観と新古典派的なそれとの概念上の区分の意義が説かれているが、それでは結局のところ、新古典派的な市場像とそれが描く一般均衡理論にはどのような総括が与えられるのであろうか(西部 [1998])。

新古典派的な「均衡」(論的市場)とは異なり、周知のように、古典派やオーストリア学派、マルクス派の「循環」・「過程」や「再生産」としての市場像が経済学の歴史には存在し、各々に理論的特徴と意義がある。フリードマンらの「市場原理主義」と異なり、新古典派内においても「市場設計=マーケッ

ト・デザイン」の思想と理論が大きな脚光を浴びつつある。マクミランによれば、市場には「多様性を容認する」と「批判を許容する」という2つのすぐれた機能的特性が内在し、「市場設計の挑戦は、利潤追求を社会的に生産的な方向へ導くメカニズムを考案したり、そうしたメカニズムの進化を促したりすることにある」（マクミラン [2007] 327 頁）。著者の目的からは逸れるかもしれないが、「市場メカニズム」について現時点で論じる以上、市場理論をめぐる最新の研究動向の考察（評価を含む）は欠かせない。

ケインズ経済学の重要な特徴として指摘された「生産の貨幣理論」からひるがえってみれば、ケインズ経済学にのみとどまらず、前節冒頭で言及されたように、経済学は主に「貨幣」と「市場」をめぐる認識の対立の歴史である。「市場メカニズム」についての省察はさらに「貨幣」にまで及んで広く深く検討されるべきものであるが、氏の議論では両者の明確な関連が焦点化されていない。「市場メカニズム」と「社会主義の崩壊」そして「ケインズ経済学」の3つを繋ぐコアの1つこそ「貨幣」である⁸。

著者においては、「行動経済学」と異なり「進化経済学」に対する評価は概して低いようであるが（橘木・根井 [2014] 73-8 頁）、進化経済学を主流派の新古典派経済学との対峙から理論的に推進させている西部忠氏は、「貨幣が市場を作る」という基本命題を構築し、さらに「資本主義の危機」の本質にも迫る一連の鋭い議論を展開している（西部 [2011] [2014]）。貨幣と市場についての基本命題は「貨幣を変えれば市場が変わる」へと集約され、「貨幣（とそれが作り出す市場）の多元性」（や「多態性」）が説かれることとなる⁹。「資本主義」という言葉を多用するという場合、それはむしろグローバ

⁸ 現実のソ連型社会主義においてはルーブルはじめ複数の紙幣が用いられていたが、社会主義の究極の目標は、無政府的な市場経済の廃絶（ないしは止揚）とそれに伴う「貨幣の廃絶」にあったといってよいであろう。社会主義と貨幣についての考察は伊藤 [1995] を参照。

⁹ 西部氏はマクミランの著書について、「ミクロ理論の教科書の中の一般均衡理論よりもずっと現実的な市場像を提供してくれる良書です」と評価する一方、貨幣への言及が全くないことを指摘し、「比較的優れた市場理解を示す経済学者ですら、貨幣を市場理論の中

リゼーションやグローバル資本主義を念頭に置いてのことにほかならず、「来るべき経済学」を展望するという難題に挑む以上、西部氏のように「経済学史的」知見を活かした、いわゆる貨幣と市場をめぐる「進化（自由）主義」的制度設計・政策観こそとりわけ重要な突破口になるだろう。西部が、「経済を理解するためには、必ずしも経済の専門家が語る具体的な経済現象についてのメカニズムの解説を読んだり、モデルや数式により市場メカニズムを説明する経済学の参考書を読んだりする必要はありません。それどころかそうした解説や説明のせいで貨幣や市場の不思議さを忘れてしまうので、それらはかえって有害とすら言えるかもしれません」（西部 [2014] 22 頁）というとき、たしかに経済学史家の根井氏の問題意識と共有する側面があるのは事実だが、氏の議論ではいかにして「来るべき経済学」それ自体を再構築しようとするのか不明瞭である。これが学史家と理論家の「守備範囲の違い」であるというならば、進化経済学者の営為はすぐれて挑戦的だ。

第 1 章の後半での、ロビンズによる「経済学の定義」の問題とそこから派生した学説である A・センの「合理的な愚か者」論（純粋な「経済人」モデル批判）は、「市場メカニズム」という主題との関連がひまひとつ不分明ではないか。そこでの議論は、新古典派の方法論・思考様式に内在する欠陥を突くものである以上、むしろ社会主義崩壊の「衝撃」の一環として（以前の作品でもその意義が高く評価されている社会主義経済計算論争をふまえて）考察したほうが、展開構成上、より望ましかったのではないか。マクミランは上記著作の「序」において、「市場の物語は、失望や失敗だけでなく、人間の創意と創造性に満ちている」（ii 頁）と述べているが、文中の「市場」は「経済学」に置換可能であり、「経済学における市場」と「(社会) 科学に

に適切に位置づけられないでいることがよくわかります」（西部 [2014] 251-2 頁）と総括している。「貨幣なくして市場なし」という一見自明に見える内容が、経済学のなかでいまだ十分に解明されていないというのは逆説的なインパクトをふくめて実に興味深い。また沖公祐氏も「貨幣の資産性」という論点を導入し、分散的・無政府的市場の特質を原理的に究明している（沖 [2012]）。両者の著作への筆者の書評もあわせて参照されたい。

おける論争」はまさにパラレルな位置関係にあるはずだ。巻末の「[あとがき]に代えて」で、シュンペーターの所見をもとに著者なりの「論争」観は提示されているが、(第1章でも)その方法論的・実践的意義に言及されていれば、本章を締め括った「理論」と「実践」の狭間の緊張関係を尊重したマーシャルの卓見も、さらにその重みを増したのではないかと思われる。

第2章のタイトルのみ、「社会主義」崩壊の衝撃というように「括弧」が付されていないのは、社会主義と呼称できる諸国がほとんど姿を消した現実動向と、「社会主義の新たな可能性」なる主題に著者自身の関心があまりないことの証左ではあろうが、経済民主主義の充足や社会的再生産過程を伴う経済活動における「人間労働(労働者)」の観点は依然として重要であり、社会民主主義・福祉国家の再定義とあわせ、むしろその意義を高めている¹⁰。マルクス学派において、「資本主義(的市場経済)の原理とか原則の経済思想史的な確認の作業」(上条[2006]163頁)があらためて展開され始めているし、現代制度学派のホジソンも「混成原理/非純粋性原理」によって「資本主義の多様性」を論じ、「労働者自主管理モデル(市場社会主義)」を将来的なオルタナティブ社会経済システム(シナリオ)として積極的に構想している(ホジソン[2004])。「社会主義の新たな可能性」を模索する学問上の問題関心の有無や濃淡に起因しているとはいえ、本書では社会主義崩壊の「衝撃(=成果)」として、進化ゲーム論にもとづく比較制度分析がやや「過大評価」されている印象を受ける¹¹。ただこうした筆者の見解は外在的かもしれない。

¹⁰ ケンブリッジのマルクス経済学者ドップと盟友のスラッファはこの観点を重視していた。両者の思想と理論、その関連についての考察と検討は塚本[2009]を参照されたい。

¹¹ 橋木氏との対談本において根井氏が、「青木さんにはある意味、ラディカルあるいは革新的であろうとし続けたというふうにも見える面があるんですね(橋木・根井[2014]83頁)と述べ、さらに次のようにも語っていることが(過大評価の)「理由」の一端を示唆しているように思われる。「分析手法としてゲーム理論は使ったけど、日本的な企業であろうと経済合理性があるということを使ったわけで、それはアメリカ人ならやろうとしないことだと思っんですね。比較制度分析にしても、日本の制度はアメリカとかとは違う、日本は特殊だと言っているだけの人に与せず、ゲーム理論を使って経済的な合理性があることを厳密に論証した。その仕事は、ご本人の意図は分かりませんが、やはりアメリカ人ならやらなかったらうなと私は思うんです(同上書、149頁)。

(2) 経済思想の「多様性」論

多様な経済思想を学ぶことは自らの学問的立場を「相対化」し、「寛容の精神」を養うことにも寄与しうると本書において主張されている¹²。〈多様性〉とは「物事のさまざまな様子」・「変化に富んでいる様子」を意味し、経済思想・理論はたしかに「論争」を通じて複線的・多系的な発展を遂げてきた(塚本 [2008])。とはいえ、多様な経済思想が存在してきた歴史的経緯を「確認」する作業と、多様な経済思想を「容認」する行為とは異なる。ならば、本書のあらゆる章でおこなわれている、フリードマンの経済哲学に対する著者の痛烈な批判的評価(もはや「否定」・「否認」)は本書の問題精神(=「寛容の精神」)と整合性を欠くのではないか(著者が尊敬してやまないシュンペーターの処女作『理論経済学の本質と主要内容』の「序文」が、「すべてを理解するとはすべてをゆるすことである」という文章から始まることなど十分に承知のはずである)。フリードマンによる一連の議論に深刻な問題があるとはいえ、それらも既存の経済学批判の帰結として、経済思想を多様化したものであるという肯定的評価の対象にもなりうるからである。彼の先駆的貢献を公正に再評価することも可能だ(エーベンシュタイン [2008])。

フリードマン経済哲学の「否認」という行為はおそらく戦略的であったに違いなく、それを表現した箇所を列挙すれば枚挙に暇がない¹³。フリード

¹² 橋本氏との対談本においても「経済思想の多様性」を強調する精神は、日本学術会議による経済学教育をめぐるいわゆる「参照基準」問題に関連して明示されている。「経済思想の多様性を説くのは、現時点で標準的または主流の経済学を修めることに反対することを意味していない。というよりも、『多様性』や『異端』を謳うことによって、主流派経済学の修得がおろそかになることがあれば、それは真の意味での異端の経済理論や経済思想の発展を阻害するとさえ思っている。アメリカでガルブレイスのような異端派経済学者がときに出てくるのは、主流派経済学が確固たる地位を占めているからでもある」(橋本・根井 [2014] 195-6 頁)。「経済学史」を担当している立場からみて、それを教えるなかで「ミクロ経済学」や「マクロ経済学」の内容やその発展経緯を必ず講義することになる。社会科学としての経済学の体系的発達は〈資本主義経済の自己認識の歩み〉として成立してきたわけだから、経済学史を知ることができれば、「ミクロ経済学」や「マクロ経済学」とて、いわば新参者であることがわかるだろう。「相対化する」ためには少なくとも「歴史を知る」ことである。

¹³ すなわちフリードマンは、「ナイトの思想の歪曲の上に成立した研究者集団」(36 頁)の

マンに対する「敵性の本質」をあらためて再整理すれば次のようになる。すなわち1つ目として、時代・論壇状況において支配的な「市場原理主義（市場メカニズム万能論）」の急先鋒に位置するイデオログであるフリードマンの経済哲学を容認することはできない。もう1つは、シカゴ学派の先駆者ナイトの経済倫理学とケインズ理論の真価をほとんど理解せずして矮小化し、貧困化させたという意味での「二重の誤り=罪」を犯した論者であるということである。フリードマンの学問的系譜（ルーカスの経済学方法論など）が姿態を変えながら、依然として学界状況に多大な影響力を及ぼしていることに対する懸念も含まれている。フリードマンの「非常識」とナイトの「良識」（「常識」でなく）、ある種の知的ヒロイズムを備えた「偉大な勇者」としてのケインズという評価がこうして与えられるわけである。

著者のこうした立論を一言でいえば、「フリードマン（の経済哲学それ自体）から得るものはありませんでした」ということになる。総じて彼は「反面教師」に過ぎない。かりに「寛容の精神」を「批評の精神」、すなわち、ある学説の起源、妥当性・限界をトータルに吟味しながら、そのなかから肯定的な意味での可能性（潜在性）を見出す主体的行為と捉えるならば、フリードマンへの「極端な」スタンスも幾分か緩和されたものになったのではないか。「長期」における政府による有効需要政策を否認するフリードマンの「自然失業率仮説」が、ケインズ理論の真価と新たな可能性を、「長期的雇用」理論や「生産の貨幣理論」、公共投資の「合理的根拠」論に求める著者の学問的志向性と真っ向から対立することは明らかである。しかしたとえば、将来の増税が予想（期待）されれば現在の減税は実質的な景気浮揚効果を発揮しえないとみなす新古典派の命題（「ルーカス批判」の一形態とみなしうる「リカードの等価定理」）は、消費税引き上げが話題となる現代の日本経済にお

代表者、「ケインズから学ぶべきものがないという主張」（118頁）の提唱者である。そして彼によって、ケインズの『一般理論』は「貨幣が重要ではない」経済学として「意図的に曲解されることになる」（127頁）。なおケインズとナイトの関係についての記述はないが、2人がまさに「同時代」の学者であったことは印象深い。

いて、少なくないリアリズムを有しているともいえるのではなからうか。

佐和隆光氏がかつて強調したように、経済理論が「時代文脈性」に依存していることはもちろん、「多様性」とは異なる表現をあえて用いれば、経済思想は自由度を伴った「弾力性」を秘め、一面的理解では自己完結しえないという意味での「開放性」を備えたものであるということになるだろうか。著者が経済学における「論争」に期待する有意義な「対話」¹⁴が実現し維持されれば、既存の思想・理論体系を深化・昇華させるべく、単なる「反目」や「競合」状態から「共創的」ともよべる状態への移行が可能になるだろう。「多様性」論とは「共創性」論にはほかならない。「来るべき経済学」のために問われる経済学方法論もこれを起点とする。ケンブリッジのマルクス経済学者モーリス・ドップをセンが‘bridge-builder’ と称したことが今しきりに想起されることである (Sen [1987])。著者自身も、「ケインズ経済学が退潮していくのには、英米のケインジアンがお互いの良さを認め合わなかったことが関係しているとも言えるのではなからうか」(151-2 頁) と述べ、「共創の精神」のあり方を示唆する発言をおこなっている。その対話の突破口についての具体的論述は展開されていないが、筆者はそうした著者の姿勢を「ウィトゲンシュタイン的な学問精神の発露」をなすものとして、「寛容の精神」をもって受け止めておくこととしたい。

4. おわりに

スティグラーは自伝のなかで、「経済学で暮らしていると、経済学者は他の人々とは一味違った考えをするようになる」(スティグラー [1990] 10 頁)

¹⁴ やや古いですが、たとえば「21 世紀への対話」と題された青木昌彦氏とフリードマンによる討論は、著者の評価が明確に分かれている両者の「対話」だけに一読の価値がある (『読売新聞』2000 年 1 月 4 日)。「資本主義の未来」を問う内容もなかなか刺激的である。この「21 世紀への対話」は青木氏の HP からダウンロードできるし、氏の『青木昌彦の経済学入門—制度論の地平を拡げる』(ちくま新書、2014 年)にも所収されている。

と回想していた。『経済学とは何か』とそれを手掛かりに詳細に検討をすすめてきた本論説全体に込められたメッセージをもとにこの文章を変換すれば、「現代経済思想史/経済学史で暮らしていると、思想史/学史家は他の人々（理論家）とは一味違った考えをするようになる」といえようか。経済学史は経済学そのものを反省する契機をなす一学問分野なのだから。

その際、「論争」という科学的方法によって、経済学上の重要な諸概念を現代的に再考する試みはとりわけ今後も重要であり続ける。解決済みの問題ではなく、「謙虚な態度」で学び直すべきテーマは多い。「市場とは何か」「社会主義の思想と理論の新たな可能性とは何か、その動因とは何か」、そして「金融危機後のケインズ経済学の潜勢力とは何か」など、いずれもが壮大な主題である。これら3つの主題を繋ぐ「貨幣」についても同様だ。経済学史を「論争史」として把握するスタンスは尊重されてよい。

都留重人氏による『現代経済学の群像』（岩波現代文庫として、『近代経済学の群像』とあわせ2006年に復刊）の「あとがき」を担当された伊東光晴氏によれば、彼はもう1冊の書『経済学の群像』を執筆する意欲を持たれていたそうであるが、それは残念ながら実現されなかった。「寛容の精神」と「共創の精神」を積極的かつ究極的に推進させるならば、都留氏が構想していた上記未完書に匹敵しうる、もしくはそれをも突き抜ける学問の高揚感みなぎる作品が将来的に誕生するかもしれないし、誕生させねばならない。『経済学史の群像』ではなく『経済学の群像』である¹⁵。本書がそのエチュードであるという推測は、むしろ「合理的根拠」を欠いた（そもそも「合理的根拠」など示しえないか）筆者の「深読み（＝深追い）」である。

¹⁵ 松原隆一郎氏の『経済学の名著30』（ちくま新書、2009年）は、経済古典の現代的意義とその新たな可能性を模索する力作であり、新書とはいえ、将来的な「経済学の群像」を予感させてくれる。筆者は本書への評のなかで、「古典を制するものは経済学を制する」と述べておいた。また「問題解決のスキル」として偉人らの経済古典を読み直そうとする竹中平蔵氏の『経済古典は役に立つ』（光文社新書、2010年）は、経済学史・思想史ではなく経済政策を専門分野とする研究者の観点として着眼に値するであろう。筆者の書評も参照。

ケインズ研究で著名な伊東光晴、ケネーとスラッファ研究の第一人者である故・菱山泉の両氏から「本流としての近代経済学（ケンブリッジ学派）」の醍醐味を含む多くを摂取し、豊かな読書量に逞しく支えられた根井氏の落ち着きある文体が放つ論述内容には、抑制を課したパッションに宿る「静かなる使命感」に導かれ、幾らかの留保が付されるにせよ、経済思想の多様性論が啓蒙的に示唆される。最初と最後の両章をマーシャルの「言葉」で締める構成には彼への敬意が感じられ、ケンブリッジ大学教授就任講演からは、「美なるものへの知的関心」と「勇敢なる心的姿勢」を堅持することの肝要さを教えられる。あらためて精読した氏の『経済学とは何か』は、自らの経済学観を照らし問い直すための鏡となり、これからの「来るべき経済学」の姿を展望すべく貴重な一架橋となろう¹⁶。本論説もそのひとつになればよい。

付記：本稿は、拙稿「論争史のなかの経済学—根井雅弘著『経済学とは何か』を評する—」（基礎経済科学研究所編『経済科学通信』第119号、2009年4月15日発行）に相当量を新たに加筆し補整を加えたものである。この点につきご教示された、『経済科学通信』編集局長の森岡真史先生（立命館大学国際関係学部教授）に感謝申し上げる。

参照文献

伊藤誠 [1995] 『市場経済と社会主義』（平凡社）。

伊藤誠 [2009] 『サブプライムから世界恐慌へ 新自由主義の終焉とこれからの世界』（青土社）。

伊藤誠 [2013] 『日本経済はなぜ衰退したのか 再生への道を探る』（平凡社新書）。

猪木武徳 [2012] 『経済学に何ができるか 文明社会の制度的枠組み』（岩波新書）。

岩井克人他編 [2011] 『金融危機とマクロ経済 資産市場の変動と金融政策・規制』（東京大学出版会）。

岩井克人他 [2014] 『経済学は何をすべきか』（日本経済新聞出版）。

¹⁶ 同様の試みをなす、平井俊顕編『市場社会とは何か ヴィジョンとデザイン』（SUP 上智大学出版、2007年）、同編『市場社会論のケンブリッジ的展開 共有性と多様性』（日本経済評論社、2009年）との併読も有益だろう。この両書に筆者自身が論文を寄稿している。

論争史としての現代経済学

- 宇沢弘文 [2014] 『経済と人間の旅』 (日本経済新聞出版社)。
- 沖中祐 [2012] 『余剰の政治経済学』 (日本経済評論社)。
- 上条勇 [2006] 『グローバリズムの幻影』 (梓出版社)。
- ケインズ学会編 / 平井俊顕監修 [2011] 『危機の中で<ケインズ>から学ぶー資本主義のヴィジョンと再生を目指して』 (作品社)。
- 神野直彦他 [2004] 『経済危機と学問の危機』 (岩波書店)。
- 竹中平蔵 [2010] 『経済古典は役に立つ』 (光文社新書)。
- 橋木俊詔・根井雅弘 [2014] 『来るべき経済学のために』 (人文書院)。
- 塚本恭章 [2008] 「社会主義経済計算論争の史的展開ー競合の学派の諸相」
東京大学大学院経済学研究科博士学位論文。
- 塚本恭章 [2009] 「剰余・分配論・資本主義ーケンブリッジのドップとスラッファ」
『政経研究』第92号, 62-75頁。
- 塚本恭章 [2014] 「読書ノート (投稿) 根井雅弘『20世紀をつくった経済学ーシュンパーター, ケインズ, ハイエク』 (2011年12月, ちくまプリマー新書), 『サムエルソン『経済学』の時代』 (2012年1月, 中公選書), 『時代を読む 経済学者の本棚』 (2011年12月, NTT出版)」『経済科学通信』第135号, 55-58頁。
- 西部忠 [1998] 「多層分散型市場の理論ー不可逆時間, 切り離し機構, 価格・数量調整ー」進化経済学会第2回駒場大会報告論文 (3月29日)。
- 西部忠 [2011] 『資本主義はどこへ向かうのか 内部化する市場と自由投資主義』 (NHK出版)。
- 西部忠 [2014] 『貨幣という謎 金と日銀券とビットコイン』 (NHK出版新書)。
- 根井雅弘 [1994] 『現代経済学講義』 (筑摩書房)。
- 根井雅弘 [2006] 『経済学の教養』 (NTT出版)。
- 根井雅弘 [2008] 『経済学とは何か』 (中央公論新社)。
- 松原隆一郎 [2009] 『経済学の名著30』 (ちくま新書)。
- 吉川洋 [2009] 『いまこそ, ケインズとシュンパーターに学べ 有効需要とイノベーションの経済学』 (ダイヤモンド社)。
- エーベンシュタイン, L. [2008] 『最強の経済学者 ミルトン・フリードマン』 (大野一訳, 日経BP社)。
- ステイグラー, G. [1990] 『現代経済学の回想』 (上原一男訳, 日本経済新聞社)。
- ハーヴェイ, D. [2012] 『資本の<謎> 世界金融恐慌と21世紀資本主義』 (森田成也他訳, 作品社)。
- ホジソン, G. [2004] 『経済学とユートピア 社会経済システムの制度主義分析』 (森岡孝二他訳, ミネルヴァ書房)。

マクミラン, J. [2007] 『市場を創る バザールからネット取引まで』

(瀧澤弘和他訳, NTT 出版)。

Sen, A. [1987] “Dobb, Maurice Herbert”, in Eatwell, J. et al. (eds.), The New Palgrave: Dictionary of Economics, Macmillan, Vol.4, pp.910-912.

本論説に関わる筆者の書評 (タイトル付記)

- 1) 伊藤誠 [2009] に対して
「〈原理〉を問い直す時代へ—金融恐慌の世界史的含意を浮き彫りに」
『週刊読書人』(第 2805 号 4 面) 2009 年 9 月 18 日。
「マルクス経済学から考究する—金融恐慌の諸相と今後の世界像」
『週刊ダイヤモンド』第 97 巻 47 号 (通巻 4305 号) 102 頁, 2009 年 11 月 21 日。
- 2) 伊藤誠 [2013] に対して
「今こそ日本経済の総点検へ—〈原理〉を尊重する多面的省察, 精彩放つ」
『週刊読書人』(第 2991 号 4 面) 2013 年 5 月 31 日。
- 3) 猪木武徳 [2012] に対して
「制度史のなかの経済学—人間社会のもつ多様な難題, 広く深い眼で」
『週刊読書人』(第 2982 号 4 面) 2013 年 3 月 22 日。
- 4) 岩井克人他 [2014] (+二著) に対して
「多元性のなかのオルタナティブ—広く深い省察, 制度から思想・理論にも及ぶ」
『週刊読書人』(第 3035 号 4 面) 2014 年 4 月 11 日。
- 5) 沖公祐 [2012] に対して
「市場・余剰・貨幣の有機的円環—精密なる文献考証と論理展開で挑む」
『週刊読書人』(第 2973 号 4 面) 2013 年 1 月 18 日。
- 6) ケインズ学会編/平井俊顕監修 [2011] に対して
「ケインズの遺産, いまこそ深化へ—多彩な論議がはぐくむ〈学〉のシナジー」
『週刊読書人』(第 2949 号 7 面) 2012 年 7 月 27 日。
- 7) 竹中平蔵 [2010] に対して
「時代を見抜いた偉人たち—古典との対話を楽しむ」
『経済セミナー』(日本評論社) 6・7月号, 118 頁, 2011 年 5 月 27 日。
- 8) 西部忠 [2011] に対して
「貨幣と市場をめぐる省察, 広く深く」
『週刊エコノミスト』(毎日新聞社) 第 89 巻第 20 号・通巻 4169 号, 52 頁
2011 年 4 月 26 日。
「市場と貨幣の新たなビジョンへ—批判にとどまらぬ変革への独自の道」
『週刊読書人』(第 2890 号 4 面) 2011 年 5 月 27 日。

論争史としての現代経済学

- 9) 西部忠 [2014] (+二著) に対して
「<基本>に始まり<既存>を超える—これからの貨幣・会社論, 経済古典」
『週刊読書人』(第 3056 号 4 面) 2014 年 9 月 12 日。
- 10) 松原隆一郎 [2009] に対して
「<古典>と現代の架橋へ—多彩なルートをはぐくむ懐の深さ」
『週刊読書人』(第 2793 号 3 面) 2009 年 6 月 26 日。
「人類の『共有財産』としての古典—経済思想の知的ドラマの世界へ」
『週刊ダイヤモンド』第 97 卷 32 号 (通巻 4290 号) 104 頁, 2009 年 8 月 8 日。
- 11) 吉川洋 [2009] に対して
「時空を超えて響き合う雄大な<ビジョン>—『共創』精神の深化が導く新たな経済学の実像」『図書新聞』(第 2921 号 3 面) 2009 年 6 月 13 日。
- 12) デヴィッド・ハーヴェイ [2012] に対して
「資本・恐慌・変革の有機的円環—金融危機後の新たな地平へ」
『経済セミナー』(日本評論社) 8・9 月号, 136 頁, 2012 年 7 月 27 日。

